

## 『素問』の版本<sup>1</sup>

眞柳 誠

要旨…『素問』の版本は多数あり、字句の相違が著しいため、条文の訓詁や理解に困難をもたらしてきた。版本相互の関係が現在まで未解明だったからである。そこで成書以降の傳承史を整理したうえで、版本となった北宋以後の變化を現存諸本の字句校異、および史書・目録の記載から検討した。この結果、すでに亡佚した宋版をふくめ古本一三種の存在が確認され、相互関係を圖1「『素問』本篇の古本系統圖」に整理できた。當結果から以下の諸點が明白となった。『素問』の字句は、基本的に北宋一〇六九年の熙寧本以前に遡りえない。熙寧本（亡佚）の舊態を唯一保存するのは一五五〇年跋刊の明・顧從徳本だった。顧本を研究の第一底本とすべきことは今後も不變である。元一二八三年の讀書堂本は北宋一〇七八〜八五年の元豐本（亡佚）系統だった。日本の室町古鈔本は北宋一一二一年の宣和本（亡佚）系統だった。したがって北宋版三種の舊を保有する顧從徳本・讀書堂本・古鈔本の經注文を校異するなら、熙寧本ないし熙寧の底本に一層肉薄することも可能だろう。これら以外の現存諸版はひとしく派生本につき、字句の訓詁や条文の研究理解に使用すべきではない。

### 一 緒言

馬王堆ほかの出土醫書や『史記』扁鵲・倉公傳の記述によると、先秦時代から蓄積されてきた醫學知識と記録が複雑な經緯をたどり、諸文獻に集積されていたのはまちがいない。その一つの集大成が、『漢書』藝文志・方技の醫經に著録された「黃帝內經十八卷・外經三十七卷」だろう。『漢志』は前六六ころに成書の『七略』におおむね依據し、方技書は前漢・侍醫の李柱國が整理・分類、さらに書名をあたえた<sup>2</sup>。同時に著録された醫經の「扁鵲內經九卷・外經十二卷、白氏內經三十八卷・外經三十六卷、旁篇二十五卷」の一部系統は魏晉まで傳承されたが、南北朝ではぼ亡佚したらしい。當情況は最近の出土文獻や、『葛氏方』『脈經』と『范汪方』『小品方』が引用する文獻の相違でよくわかる。

すなわち、前漢末まで傳承された黄帝系などの基礎文獻群から取捨選擇と整理をへて、『素問』の書名と原内容が後漢の一世紀初頭にさだめられた。ゆえに本書の多くは傳説上の人物、黄帝と臣下の岐伯・雷公との問答に假託する形式で編述されている。問答形式で記述する中國・印度・ギリシャの古代文獻は多い。當然、本書や『九卷』（後の『鍼經』と『靈樞』）は一人一代の作でなく、内容や語彙には秦代を遡るもの、漢代のもの、あるいは漢以降と推定されるものが現傳本に混在している。同一篇内ですら、ことなる發展段階の論説が併記される場合もある<sup>3</sup>。

『素問』の書名が初出するのは、三世紀初から前期の『傷寒論』張仲景序の記述「素問・九卷・八十一難」で、三世紀中後期の『脈經』卷三も經文の出典に「右素問・鍼經・張仲景」と注記する。兩記錄の「素問・九卷（鍼經）」には「黄帝」も「内經」もなく、『漢志』「黄帝内經十八卷」との關係を當時は意識していない。この點は注意が必要である。また、仲景が兩書を「素問・九卷」と記録したので、當時の『素問』は九卷ではない。『隋志』ほかに著録された全元起本の卷數からすると、おそらく八卷本だっただろう。以後、本書は中國および周緣國の傳統醫學における最重要古典の一つとされ、數多の變遷をへて現在まで傳承された。

とくに北宋時代に校定・刊行されて以降、多くの醫家が本書の醫論を實踐に應用し、發展させた。これらが現代にいたるまで中國系傳統醫學の根幹を形成している。注解書や研究書も汗牛充棟で、本書が後世にあたえた影響は巨大だった。しかし幾重もの校定や出版で字句には複雑な變化が発生している。

## 二 宋代までの傳承

東晉の無名氏は『甲乙經』を四世紀後半に編纂<sup>4</sup>した。その序文で當時の『鍼經』九卷・『素問』九卷が『漢書』藝文志の「黄帝内經十八卷」との説をはじめて提起し、この説が後世に歓迎されてしまう。齊梁間の五〇〇年前後には全元起が『素問』に訓解や篇順の整理を加え、『（黄帝）素問』八卷を編纂した<sup>5</sup>。これを著録した『隋志』の段階ではじめて書名に「黄帝」を冠して權威づけられたのは、隋の醫官教育と關係するだろう。

唐の永徽醫疾令（六五一）は當時の韓國・日本でも同様に規定<sup>6</sup>。され、各國令で鍼生の教育・考試に規定された『素問』は全元起本だったらしい<sup>7</sup>。全元起本は北宋以降に亡佚している。唐代では王冰が全元起本も參照し、各篇「次」にわたり「注」をくわえた「次

注本」八巻を編纂（七六二）し、書名は全元起本とおなじ「黄帝素問」だった。王冰も『甲乙經』序の「黄帝内經」説を踏襲したが、「鍼經」を「靈樞」と呼稱した。これゆえ、高麗獻本にもとづく北宋一〇九三年版の『鍼經』が南宋一一五五年に再版されたとき、『靈樞』に改名されたことは後述する。さらに五代く北宋初期に七篇大論の運氣經文が作成され、その注文も王冰の名に託して偽作され、改變された王冰序と同時に北宋初期の段階でくわえられて次注本二四巻となった。この二四巻本にもとづき、北宋の新校正本が校刊されたのである。

### 三 版本系統

まず全體の理解のため、**圖1**「『素問』本篇の古本系統圖」をあらかじめ揭示する。本圖は音釋や亡篇（遺篇）をのぞく經文・注本の系統で、各本は**A系統**、**B系統**、**C系統**、**D系統**の背景色で區別し、**かこみ字**は現存本をしめす。

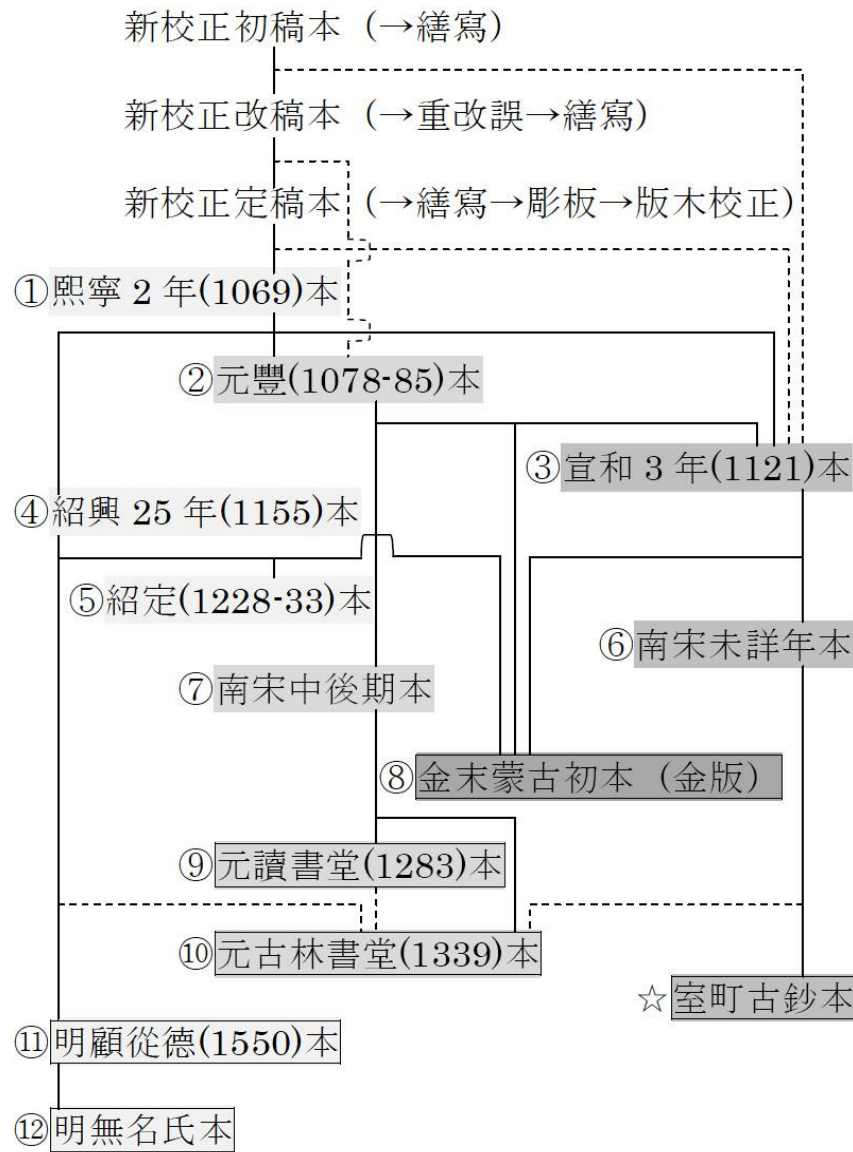


圖1 『素問』本篇の古本系統圖

A ①北宋熙寧二年の新校正本を覆刻し卷末に音釋を付加した④南宋紹興二五年本、紹興本を再版した⑤南宋紹定本、紹興本を影刻した⑩明顧從徳本、顧從徳本を覆刻した⑫明無名氏本の系統

B 新校正の改稿本と熙寧本を再校定して注下に音釋を付加した②北宋元豐本、元豐本を翻刻した⑦南宋中後期本、南宋中後期本を覆刻して亡篇を付録した⑨元讀書堂本、南宋中後期本と亡篇を翻刻して一部字句をあらためた⑩元古林書堂本の系統

C 熙寧本・元豐本に新校正の初稿本と定稿本も併用し、注下に音釋を付加した③北宋宣和三年本、宣和本の⑥南宋未詳年翻刻本にもとづく日本の室町古鈔本

D 元豐本・宣和本に紹興本系を併用して卷末に音釋も付加し、亡篇を付録した⑧金末蒙古初刊の金版

#### 四 北宋版

##### ①熙寧本

北宋政府は『素問』を天聖・景祐・熙寧・政和の四次にわたり校定し、天聖・熙寧・政和の校定本は刊行された<sup>9</sup>。天聖醫疾令(一〇二九)で鍼學の必習書とされた『素問』<sup>10</sup>は天聖校刊本だっただろう。なかでも校正醫書局の高保衡・孫奇・林億が擔當し、さらに孫兆も參與した校定がもつとも大規模で、林億等序が「臣等承乏典校、伏念旬歲」と記す前後一〇年にわたる新校正で熙寧二年(一〇六九)校刊<sup>11</sup>の熙寧本となった。かれらは初稿本・改稿本・定稿本と校定をかさね、彫板後も版木から不正字を削除し、脱字を補刻していた。これは後述の顧從徳本にある空格部分を、室町古鈔本と比較すると判明する。今日につたわる『素問』の全版本はこの熙寧本を祖とする。南宋の『直齋書錄解題』<sup>12</sup>や『通志』藝文略<sup>13</sup>の著録ほかからすると、熙寧本は正式書名「補注黃帝內經素問」・内題「黃帝內經素問」の二四卷七九篇だった。醫書の卷末に音釋(字音・字義・聲調)を付すのは北宋末以降の風潮につき、熙寧本は注下にも卷末にも音釋がなかったと推定できる。現存各本からすると王冰序は「黃帝內經素問序」、林億等序は「校正黃帝內經素問序」と題したらしい。當段階あるいは天聖・景祐の校定段階で書名に「內經」が付加され、「黃帝內經素問」となった。これが『素問』こそ前漢の「黃帝內經」の一部との傳説を裏づけ、現在まで通説とされる一因となった。しかし熙寧本も現存しない。

##### ②元豐本

北宋の元豐間(一〇七八～八五)には、全篇にわたり注下に音釋が付加された私家版の孫氏校刊本もあった。元豐本は後述する元・古林書堂本の總目冒頭にある木記の記述、お

よび古林本と元・讀書堂本の書式・字句の特徴からわかる。元豊本は孫兆個人が再校定し、出版には『宋史』で姦臣とされた宰相の呂惠卿が關與した可能性もある。孫兆の弟・孫宰は呂惠卿の部下だった時期があり、惠卿は編校集賢院書籍・秘書省校書郎・判國子監を任じ<sup>14</sup>、出版にも精通していたからである。讀書本・古林本からすると、元豊本の正式書名は「補註釋文黃帝内經素問」、内題は「新刊黃帝内經素問」だっただろう。林億等序は「校正黃帝内經素問序」と題して末尾に高保衡・孫奇・林億の列銜を記し、王冰序は「黃帝内經素問序」と題して末尾に孫兆の銜名を記したらしい。元豊本も現存しないが、舊態は⑦南宋中後期坊刻本の再版本を介して讀書本に保存される。

### ③宣和本と室町古鈔本

徽宗帝の時代には醫官の育成制度が變更された。崇寧二年（一一〇三）に首都・開封の醫學校における教科書がさだめられ、その筆頭が『素問』だった。政和五年（一一一五）には各地の醫學校にもほぼ同様の規定が實施された<sup>15</sup>。こうした醫官育成の擴充に對應するのが、北宋最後の『素問』校刊だったらしい。當事業は徽宗の關心もあり、宰相の蔡京と長子の蔡攸が主唱した。蔡京を最高責任者、蔡京第二子の蔡儵を實質監督に政和八年から開始し、スタッフには儒官・醫官・道士が選任されている<sup>16</sup>。「校正内經・同詳定官」の蔡儵は宣和三年（一一二二）二月二五日に名譽學位の「進士出身」を賜った<sup>17</sup>ので、校定は同年までに完了し、その前後に刊行されただろう。これが宣和本である。

ところで日本の宮内廳書陵部に室町時代一四世紀中葉～一五世紀中葉筆寫の古鈔本『素問』が所藏され、その卷一八末尾に「假承務郎權醫學錄臣趙叔度校正／軍器庫副使兼翰林醫官盧德誠校正」の列銜がある。慕容彦逢（一〇六七～一一一七）が徽宗に侍したときの詔勅等を編集した『摘文堂集』に、盧德誠等を醫功により進官一等と記録<sup>18</sup>されるので、室町古鈔本の底本は宣和本の系統だったと確證できる。室町古鈔本を検討した結果、宣和本二四卷七九篇は熙寧本と元豊本を底本とし、新校正の初稿本と定稿本も参照していた。經注文の大多數は熙寧本・元豊本雙方の特徴を繼承するが、あらたな字句の校正や補足もなされた。音釋を注下に配する點は元豊本にしたがい、多くの音釋を轉載したが、一部には増損がある。正式書名は「補註釋文黃帝内經素問」で、卷頭・卷末題は「黃帝内經素問」だったらしい。

北宋首都の開封に金軍が侵攻した「靖康の變」直前に蔡京一族が姦臣として斷罪され、宣和本は版木が金軍に掠奪された理由もあり、今日まで歴史の闇に埋没していた。宣和本

も現存しないが、南宋の坊刻再版で巻頭・巻末に「重雕補註釋文黃帝內經素問」と題され、卷一八末のみ舊題と校定擔當官の列銜が偶然のこされた。この⑥南宋未詳年刻本を筆寫したのが室町古鈔本である。

## 五 南宋版

### ④紹興本

南宋の國子監は成都の史崧が献上した北宋・元祐八年（一〇九三）刊の『鍼經』九卷本系を底本とし、書名・卷數を『靈樞』二四卷に改變して紹興二五年（一一五五）に序刊した。この時、國子監は紹興本『素問』も合刻し、兩書をはじめ「黃帝內經」と統稱している。王冰の言にしたがって『鍼經』を『靈樞』に改名し、『素問』二四卷と合致させるため九卷を二四卷に分卷したのだった。紹興本『素問』を精緻に影刻したのが後述の明・顧從徳本である。顧本を検討したところ、紹興本は熙寧本の經注文を覆刻していた。ただし『靈樞』と合刻したので、序題と巻頭・巻末題では二書の合編を意味する「重廣」を付加し、「重廣補註黃帝內經素問」に改稱・統一している。

こうした改變を主導したのは、侍醫として南宋初代皇帝の高宗を籠絡し、『宋史』が倭幸に列した王繼先（一〇九八～一一八一）<sup>1)</sup>と門下の醫官だった。かれらは元豐本と宣和本の音釋を引用して熙寧本の卷末餘白に付記し、新作音釋も杜撰に追加したため、各種多量の問題が発生している。かれらの付加らしい總目「黃帝內經目錄」にも問題があった。紹興本には王繼先等の序や列銜などもあっただろうが、王繼先が一六一年に彈劾・追放<sup>2)</sup>されたため、その後の南宋では紹興本を重印や再版の際に繼先等の序跋・列銜を削除した。これらの背景もあり、紹興本での『素問』『靈樞』合刻や、音釋付加等の事情が今日まで一切気づかれていなかった。紹興本『素問』も現存しないが、舊態は顧從徳本に保持されている。南宋では國子監の重刊らしい⑤紹定（一二二八～三三）本、古鈔本の底本で宣和本にもとづく⑥南宋未詳年坊刻本、元豐本をやや丁寧に翻刻した⑦南宋中後期坊刻本もあったが、みな亡佚しただろう。

## 六 ⑧金版

刻工名から金末蒙古初一三世紀中葉の平水刊本と判断できる金版が、中國國家圖書館に

唯一現存<sup>21</sup>する。民國時代に出現<sup>22</sup>し、卷二〜五・一一〜一四の二冊および卷二五〜一八・二〇と亡篇の三冊が補配されて現在につたわる。卷末にある大量の音釋は一部があきらかに紹興本系からの轉用で、經注文も紹興本系を主底本とし、一部に元豐本系と宣和本系も使用していた。付録の『亡篇』二篇は北宋初期<sup>23</sup>の鍼治療と醫藥をたしなむ道士が、『素問』とくに運氣七篇を参照して捏造したらしい。すでに熙寧本の時代から流布し<sup>24</sup>、宋版『素問入式運氣論奧』に『素問遺篇』が付録されていた<sup>25</sup>ので、金版はこれを轉録した可能性もあつた。金版の底本とされた紹興本系・元豐本系・宣和本系は、その舊を比較的正確につたえる各本が現存する。したがって各本を上まわる價值を金版にみとめることはできない。

七 元版

⑨ 讀書堂本

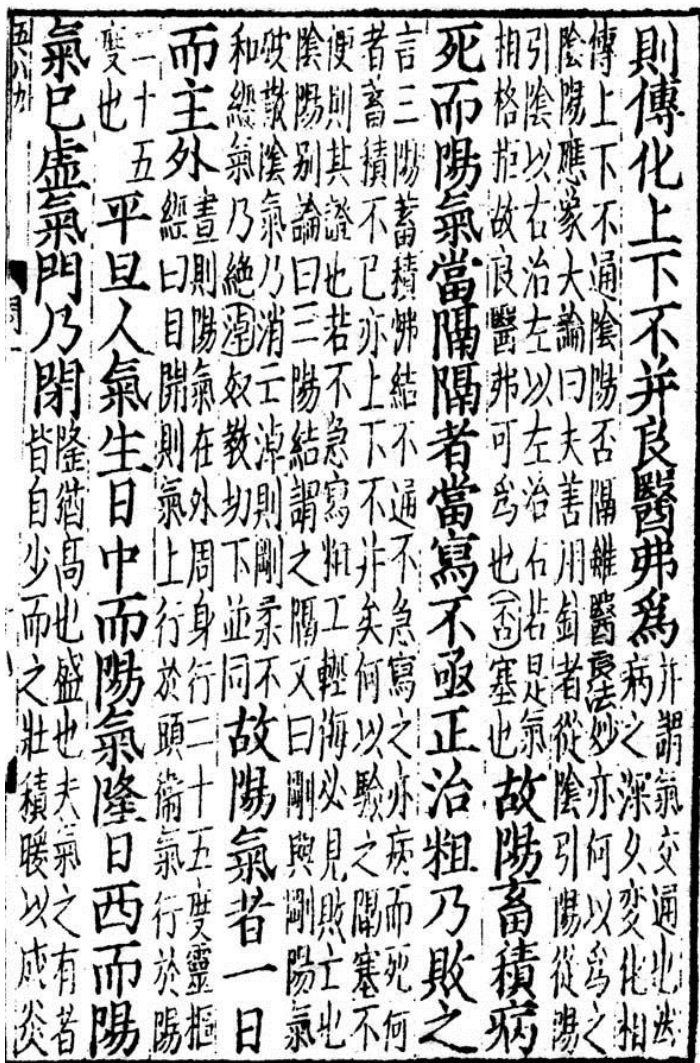


圖2 元・讀書堂刊『素問』

(『再造善本』、2006)

元の讀書堂本二四卷・付『亡篇』二篇は民國時代に出現<sup>26</sup>した。その一點が現在の中國國家圖書館(圖2)に所藏され、「海鹽張元濟／庚申歲經收」の藏印記があるので、張元濟が民國庚申年(一九二〇)に入手している。かれの『涵芬樓燼餘書錄』(一九五二)にも著録<sup>27</sup>される。これとは別本で、「 歲癸未中和節、書于讀書堂」の序文もある讀書本が民國時代<sup>28</sup>に著録されたが、現所在は不明。當序文の「歲癸未」より、讀書本は前至

元二〇年（一二八三）の序刊と推定できる。ただし國家圖書館本に付録の『亡篇』は、字様からみて明・嘉靖年間前後の修補だった。讀書本は宋諱の缺筆があるなどの特徴から、元豊本にもとづく南宋中後期翻刻本の覆刻と判断できる。僞撰の『亡篇』が付録されるものの、『素問』本篇の字句は問題が比較的すくなく、元豊本の舊態を濃厚に遺存していた。今後は『素問』研究の重要底本とされねばならない。

#### ⑩ 古林書堂本

江西廬陵の古林書堂が二四巻を一二巻に改編し、元の後至元五年（一三三九）出版した古林本は多數現存する。木記に「元豊孫校正家藏善本」という南宋中後期本にもとづく翻刻のため、讀書本と兄弟関係にある。しかし一部字句には紹興本系と、宣和本系の南宋末詳年翻刻本による「校正」が確認された。巻数や諸書式まであらためたのは讀書本との近似をさける目的があったらしい。一方、古林書堂本『運氣論奥』に付録の『遺篇』（舊名は亡篇）を他本と比較すると、古林本・讀書本は同系、金版は別系だった。古林本の本篇も元豊本の舊態をつたえるが、脱文・節略や略字・俗字の多用、妥當性のひくい字句が讀書本より多い。

古林本『素問』の影響は大きく、明代だけでも『道藏』本（一四三六～六九）・熊宗立本（一四七四）・田經本（嘉靖初期）・詹林所本（嘉靖前期）・種德堂本（一五五三）・趙府居敬堂本（嘉靖年間）・吳悌本（一五三二頃）として翻刻された。また、三木は朝鮮本『新刊補註釋問黃帝內經素問』一二巻に活字版と整版の六種を報告<sup>29</sup>し、その書名・巻数からも古林本系と指摘する。刊年の記載があるのは三木が第五にあげる萬曆四三年（一六一五）の内醫院刊訓鍊都監活字本で、『素問入式運氣論奥』三巻を付印していた。乙亥活字本『素問』にも『運氣論奥』が付印され、いずれも古林本系である。

## 八 明版

#### ⑪ 顧從徳本

『素問』の明版は各本が現存するが、筆頭は顧從徳本である。一五三八年に嘉靖帝の侍醫・太醫院御醫となった上海の名家・顧定芳（一四八九～一五五四）<sup>30</sup>の二男が從徳（一五一八～八七）で、朝廷で鴻臚寺序班の官にのぼった<sup>31</sup>。顧氏父子が紹興本を精緻に影刻したのが一五五〇年跋刊の顧本である。その初刻本は從徳跋二葉を付すが、跋文をぬき去



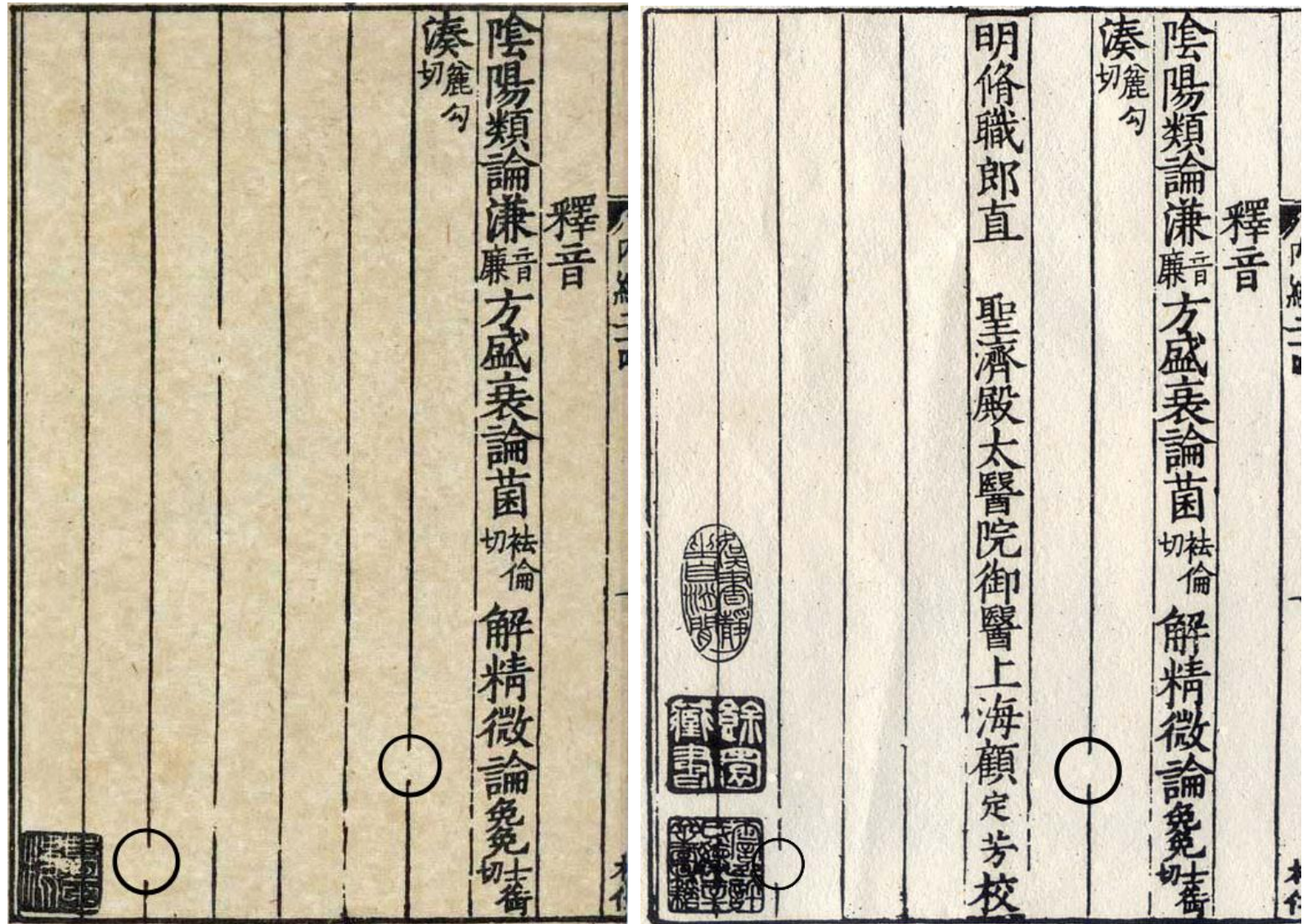


図3 左・校記切除の半葉9行本と右・顧氏補刻半葉10行本（入木で校記を補刻している）

○でかこんだ界線断裂の一致から同一版木の印本とわかる

ると宋版をいつわるのも可能なレベルだった。『経籍訪古志』に著録された「明代摸刻宋本」の實態である。こうした宋版への偽装をふせぐ目的もあり、おそらく定芳没の一五五四年以降に校記を入木で書末に刻入（圖3右）したのが顧氏補刻本だった。それでも現存補刻本の大多数は巧妙に校記まで切除（圖3左）され、宋版に偽装されている。

かつて『訪古志』が仿宋版とした⑫明・無名氏による『靈樞』との合刻本も、嘉靖後期の業者が幾重にも偽装した顧本の海賊版だった。無名氏本の影響は四庫全書本『素問』にもみとめられる。真正の顧本にもとづく明・清の翻刻本および日本・安政四年（一八五七）の覆刻本もあるが、近現代の影印本にはおよばない。しかし影印本でも底本の優劣などがあるため、利用には注意を要する。その他の明清版・朝鮮版・和刻版は、ひとしく上記各本からの派生につき割愛したい。

## 九 結語

『素問』は以上のごとく、約二千年の時空をへる過程で多くの訛字や増損が生じた。一方でそれらの校定がかさねられ、「妥当性のひくい字句」を「たかい字句」に改易してきた。校定によつて唐代はおろか漢代、さらに上古の字句に「復古させる」という信念、「復古しうる」という確信があつたゆえだろう。しかし一度變化した字句は、客觀的に校勘し、論理的に訓詁しても、妥当性でしか是非を議論できない。『素問』『靈樞』の經文を『太素』と比較すると、推定を超越した字句の變化に愕然とするときがある。現在の『素問』『靈樞』研究は、ようやく當段階にいたつた。

『素問』にかぎるなら結局、熙寧本以前には基本的に遡りえない。したがつて熙寧本の舊態を唯一保存する顧從徳本を、第一の底本とすべきことは今後も不變である。元豐本系の讀書本および宣和本系の古鈔本と經注文を校異することで、熙寧本ないし熙寧の底本に一層肉薄することも可能だろう。それ以前の様相を理解するには『太素』や『甲乙經』等との校對が有用だが、限界もある。上記以外の現存諸本はひとしく派生本だった。これら各本は版本研究に有用だが、字句の訓詁や條文の研究理解には不適切と判断された。

『素問』は魅力的、かつ示唆にとむ經文を保有した中國最古の醫學古典である。しかし「校定」されつづけた歴史をみるなら、その解釋や利用には如上の問題があつた。今後のさらなる研究でも一層の注意が必要、と痛感せざるをえない。

## 文献と注

- 1 本稿は以下の拙報の概要である。「『素問』版本研究(その一)」『季刊内経』一八八號四～五七頁、二〇一二。「同上(その二)」同上 一八九號四～四二頁、二〇一二。「同上(その三)」同上 一九〇號四～四四頁、二〇一三。「同上(その四)」同上 一九一號四～四〇頁、二〇一三。
- 2 柳長華「『漢書・藝文志』醫經著録研究」『山東中醫藥大學學報』二三卷二期一三七～一四一頁、一九九九。
- 3 劉伯堅(丸山敏秋譯)『黃帝内經概論』一七～三三・一〇六～一一八頁、千葉・東洋學術出版社、一九八五。
- 4 『甲乙經』は皇甫謐(二二五～二八三)が三世紀後半に編纂したと通説されてきた。ところが本書は諸點で三世紀中後期の『脈經』を意識・参照して編纂している。また、卷七以後で孔穴主治文を「病症+穴名+主之」の形式で記述し、仲景醫書の「病症+方名+主之」を轉用した。當形式は仲景書の影響もあつて葛洪以降の東晉からはじまり、范汪(約三〇八～三七二)の四世紀後半で徐々にひろまっていたことが『醫心方』所引の『范汪方』佚文からわかる。つまり『甲乙經』は東晉四世紀後半頃の無名氏が編纂したに相違ない。『甲乙經』の引用文が『小品方』(四五四～四七三)に初出(『醫心方』卷二)する史實も、これを傍證する。
- 5 ①藤山和子「全元起注『黃帝素問』の成立について」『東方學』七〇輯一八～三二頁、一九八五。②松木きか「『黃帝内經素問』「全元起注本」の復元と「王冰注本」の構成」『集刊東洋學』六六號六〇～八二頁、一九九一。③段逸山『『素問』全元起本研究與輯復』全二七六頁、上海科學技術出版社、二〇〇一。
- 6 ①丸山裕美子「北宋醫疾令による唐日醫疾令の復原試案」『愛知縣立大學日本文化學部論集』第一號(歴史文化學科編)二二～四〇頁、二〇一〇。②丸山裕美子「律令國家と醫學テキスト―本草書を中心に」『法史學研究會會報』一一號二五～四一頁、二〇〇七。③程錦「唐醫疾令復原研究」、天一閣・中國社會科學院歷史研究所天聖令整理課題組『天一閣藏明鈔本天聖令校證』五五一～五八〇頁、北京・中華書局、二〇〇六。
- 7 『日本國見在書目録』(八九一～八九七)の醫方家筆頭に「黃帝素問十六、全元起注」のみ著録されるので、各國醫疾令の規定書は全元起本だった可能性がたかい。
- 8 ①范行準『中國醫學史略』一二六～一三四頁、北京・中醫古籍出版社、一九八六。②山田慶兒『氣の自然像』一～二五頁、東京・巖波書店、二〇〇二。

- 9 王應麟『玉海』卷六三／一一九六頁、江蘇古籍出版社・上海書店影印本、一九八七。
- 10 天一閣・中國社會科學院歷史研究所天聖令整理課題組『天一閣藏明鈔本天聖令校證』五五一～五八〇頁、北京・中華書局、二〇〇六。
- 11 松木きか「北宋の醫書校訂について」『日本中國學會報』四八集一六四～一八一頁、一九九六。
- 12 陳振孫『直齋書錄解題』、許逸民ら編『中國歷代書目叢刊』第一輯下一三六〇頁、北京・現代出版社、一九八七。
- 13 岡西爲人『宋以前醫籍考』五頁、台北・古亭書屋、一九六九。
- 14 脫脫等『宋史』二八九・三〇八～三〇九・一三七〇五～〇八頁、北京・中華書局、一九七七。
- 15 徐松輯『宋會要輯稿』崇儒三之一二・同三之一六～一九、北京・中華書局影印本二一九九・二二〇一～〇三頁、一九五七。
- 16 徐松輯『宋會要輯稿』崇儒四之一〇・一一、北京・中華書局影印本二二二一頁、一九五七。
- 17 徐松輯『宋會要輯稿』選舉九之一六、北京・中華書局影印本四三九〇頁、一九五七。
- 18 四庫全書本（永樂大典本）『摛文堂集』卷七に、「西綾錦副使兼翰林醫官副使蓋演醫官副使盧德誠・翰林醫官賜緋丁銳・翰林醫學李師老、可各轉一官制。／救具官某等。爾等祗事衛府醫診有勞、宜錫恩章、昭示嘉獎、進官一等。其克欽承可」とある。
- 19 脫脫等『宋史』一三六八六～八八頁、北京・中華書局、一九七七。
- 20 方春陽『中國歷代名醫碑傳集』一六五～一七一頁、北京・人民衛生出版社、二〇〇九。
- 21 眞柳誠「現存最古の『素問』」、北京圖書館藏の金版『漢方の臨牀』四六卷九號一五三六～三八頁、一九九九。
- 22 ①王文進『文祿堂訪書記』一六七頁、上海古籍出版社、二〇〇七。②丁福保・周雲青『四部總錄醫藥編』三二〇頁、上海・商務印書館、一九五五。
- 23 王玉川・梁峻「『素問遺篇』成書年代考辨」『北京中醫學院學報』一九九三年第二期一〇～一三頁。
- 24 『素問』卷二一冒頭の篇目に「刺法論篇第七十二亡、本病論篇第七十三亡」と明記される。また篇目下の新校正注にも、「詳此二篇、亡在王冰之前。按病能論篇末王冰注云、世本既缺第七二篇、謂此二篇也。而今世有素問亡篇及昭明隱旨論、以謂此三篇、仍託名王

冰爲注、辭理鄙陋、無足取者」と記される。

25 岡西爲人『宋以前醫籍考』六一頁、台北・古亭書屋、一九六九。

26 孫殿起『販書偶記』二二七頁、上海古籍出版社、一九八二。

27 李茂如等『歷代史志書目著錄醫籍匯考』一二四一頁、北京・人民衛生出版社、一九九四。

28 丁福保・周雲青『四部總錄醫藥編』三二〇頁、上海・商務印書館、一九五五。

29 三木榮『朝鮮醫書誌』二〇三～二〇七頁、大阪・學術圖書刊行會、一九七三。

30 ①高毓秋「滬地出土明墓及濕屍考古兩則」『醫古文知識』一九九五年一號三三～三五頁。②方春陽『中國歷代名醫碑傳集』五四三～五四五頁、北京・人民衛生出版社、二〇〇九。

31 王世貞『弇州四部續稿』卷一〇七（『四庫全書』集部別集類・明洪武至崇禎）に、「孺人……得壽六十、有六子婦事見前。女三適鴻臚寺序班顧從德」とある。

（茨城大學人文學部教授）